

第二期 第八十七号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトーブ

学びあう人々のために

2023. 10. 10 定有堂書店 発行

読書に追いつかれて

『小さな声、光る棚 新刊書店Titleの日常』読書会
本と「交換様式D」

知らぬことを知る妙味

本を作る側から (7)

汽水のほとりから (31)

人民食堂の夜 (下)

ドクシヨカイ、ドクシヨシツ

茶 話

鳥取あれこれ その八十六

八代日記 (四十二)

家路

ちよつといいホテル

.....

編集後記



奈良 敏行

三砂 慶明

岩田 直樹

木元 健二

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

松田 裕史

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

ドラメリア

読書に追いつかれて

奈良 敏行

(定有堂 主人)

四十三年前に定有堂書店を開業したとき、「本」を読むことに別れを告げた。理由は何だったのだろうか。いまとなつては判然としない。蔵書は本屋の二階にしまい込んでいた。二十年ほど前に古書の鑑札を入手したのをきっかけに、店内で少しづつ販売していた。

定有堂が閉店して、蔵書は自宅へ持ち帰った。このところ読みたい新刊に出会わないので、しかたなく持ち帰ったダンボールを開いて退屈を紛らわせている。生き残った本たちが四十三年ぶりに顔を見せはじめている。

気になる本の筆頭はスタロバンスキー『透明と障害 ルソーの世界』みずず書房だ。「無実(イノサン)な存在と罪ある外観」「それらを被っている仮面よりも、はるかに美しい顔がある」、そんな言葉にラインを引いている。外観の虚偽というテーマの本なのだ。そしてデリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて』現代思潮社。これは前の本の価値を転倒させるものだ。どうもそういう議論らしいと理解したが、わたしの「読書」の刻はここで止まって

しまつていた。

埃をかぶつた淡野安太郎『ベルグソン』勁草書房もある。白水社の全集も持つていたが十年ほど前「読む会」の若者にあげてしまつた。全く忘れていたがドウルーズ『ベルグソンの哲学』法政大学出版局を持つていたのは驚いた。ここ一年ドウルーズを初めて読むつもりで読み漁つていたからだ。

筑摩書房の世界文学全集『マラルメ・ヴェルレーヌ・ランボオ』も忘れていた。ポオからボードレーヌ、ランボオそしてヴァレリーといい探求のつらなりに興味があつた。人文書院のボードレール全集は生き残つていた。想像力の系譜でもあるのだが、自己救済の歴史でもあつた。一度手放した平井啓之『ランボオからサルトルへ』は講談社学術文で再購入した。ヴァレリーの本はなぜか閉店のどききで失われてしまつていた。幸い『テスト氏未完の物語』現代思潮社は残つていた。谷崎精二訳『ポオ全集』春秋社も出てきた。これらの世界をひもづけるエドモンド・ウイilson『アクセルの城』せりか書房も古びた姿で発掘された。ポオについては論集で八木敏雄編『エドガー・アラン・ポー』冬樹社も何度か人にあげようとしたのだがなぜか手元に残つてしまつた。

サルトルも人文書院の全集が見つかった。『実存主義と

は何か』をはじめめぼしいものを店頭で古書販売したのが少し悔やまれる。

すっかり忘却していた本も立ち現れた。秋山駿『内部の人間』南北社、これは現代評論選書の一冊なのだが、古書店で飛びぬけて一番値段が高かつたので何事かと思ひ購入した本だ。以後この人の本を読みつづけていた。本多秋五『転向文学論』未来社も大切にしていた本だ。埴谷雄高『濠渠と風車』未来社も懐かしい。吉本隆明講演集『敗北の構造』弓立社も出てきた。ダンボールを開きつづけたら『吉本隆明全著作集』勁草書房も見つかった。

あと柳父章『翻訳の思想 「自然」と NATURE』平凡社選書。この人の本は付き合いが長かつたのでほとんどサイン入りで持つている。

捨てたはずの「本」が思いがけなく現れる。なぜ捨てたのだろう。古びたある本を開いたら「強い実行力が方法の困難を征服して大成する……」と記したメモが挟まれていた。抜き書きだった。

この四十三年、その「実行力」に賭けていたのだろうか、それももう必要なくなつた。剥ぎ捨てて身軽になつたら、隣にこれらの書物が並んでいた。しばらく思い出話をしながら歩こうと思う。その後は、追い越されるだろうか。それとも再びわたしが彼らを置いてけぼりにして駆け出し

ていくのだろうか。

2023. 9. 28

スタロバンスキー『透明と障害 ルソーの世界』みずす書房 1973
デリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて上下』現代思潮社 1972

淡野安太郎『ベルグソン』勁草書房 1966

ドゥルーズ『ベルグソンの哲学』法政大学出版局 1974

筑摩書房世界文学大系『マラルメ・ヴェルレーヌ・ランボオ』1968

『ボードレール全集』人文書院 1970

平井啓之『ランボオからサルトルへ』弘文堂 1958

『テスト氏未完の物語』現代思潮社 1967

谷崎精二訳『ボオ全集』春秋社 1971

エドモンド・ウィルソン『アクセルの城』せりか書房 1968

八木敏雄編『エドガー・アラン・ポー』冬樹社 1976

サルトル『実存主義とは何か』1973

秋山駿『内部の人間』南北社 1968

本多秋五『転向文学論』未来社 1970

埴谷雄高『濠渠と風車』未来社 1970

吉本隆明講演集『敗北の構造』弓立社 1973

『吉本隆明全著作集』勁草書房 1968

柳父章『翻訳の思想 「自然」とMATURE』平凡社選書 1977

定有堂教室「読む会」(岩田直樹氏 選書)

10月31日 火曜日 19時から

テキスト 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』新潮文庫

定有堂教室「ドゥルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

10月12日 木曜日 19時から

テキスト『レヴィナス・コレクシオン』ちくま学芸文庫)
(「ヒトラー主義哲学に関する若干の考察」) 副読本『検証ナチスは「良いこと」もしたのか?』岩波ブックレット

太極拳教室(会場 定有堂二階・他二カ所) 葉香クラブ
毎週 水曜 19時半から ・土曜 13時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員
三段 公認B級指導員

定有堂教室 「読書室ピオトープ」小説を読む会です

10月19日木曜日 第6回 19時半から

テキスト オースター『写字室の旅／闇の中の男』新潮文庫

『小さな声、光る棚 新刊書店Tilleの日常』読書会

三砂 慶明

(読書室)

台風で順延した読書会を、9月5日に定有堂書店2階で開催することができた。

地元の「読む会」有志の皆様だけでなく、わざわざ岡山や神奈川からも参加してくださる方がいて、読書会の幸福ということを噛み締めることができた一夜になった。

読書室の読書会の構成はとてもシンプルで、参加者の方に読んできた感想を聞くと、ただそれだけのことしかしていない。

なんだそれだけかと拍子ぬけされる方もいるが、そこから本について語り合うことができたなら、それ以上何も必要なものはないという気がしているのだ。(皆様どうでしょうか?)

今回の読書会がイレギュラーだったのは、本の著者である本屋Tille店主の辻山良雄さんと、定有堂書店の奈良敏行さんが参加していることだった。本の著者が参加していることに加えて、35年にわたって続く読書会「読む会」

を主宰されている奈良さんが会場にいらっしゃることをどう考えたらいいのか。二人のレジエントを前に授業をする新人の教員といった喩えが適切なのかはわからないが、途中、緊張のあまり頭の中が白くなりかかった。しかし、参加者の皆様からの本の感想の言葉に耳を傾けているうちに、なんとか意識を取り戻すことができた。

本屋で本屋の本の読書会をするなら、やはりそこには工夫が必要だ。しかし、自分でそう考えてみたものの、どんな工夫をしたらいいのかよくわからなかったので、早速、奈良さんにたずねてみたところ、

「辻山さんの本なら、やっぱりリブロを抜きには話せませんよね」と答えて下さった。

「たしかにその通りですね。ちなみに、辻山さんの本はすでに、『本屋、はじめました』、『365日の本』、『ことばの生まれる景色』、『小さな声、光る棚』があります。が、奈良さんならどれを選びますか?」

「『小さな声、光る棚』じゃないですか。一番新しいし、なんだか牧師さんみたいじゃないですか」

奈良さんの導きのおかげで、いきなり道が開けた。

というか、なぜそのことを思いつかなかったんだろうというくらい、自分の近視眼が残念でならないが、奈良さんがいうリブロには、二つの意味があるように思えた。

一つ目は、辻山さんが本屋をはじめる前に働いていたのが、リブロというナショナルチェーンだったこと。リブロは1975年に西武百貨店内に誕生した書店で、1980年代に流行した「ニューアカデミズム」とともに絶頂を迎え、本をどう並べるかということを書店の特色として掲げた最初の個性派書店だ。その象徴ともいえる存在が、「今泉棚」の今泉正光さんで、今泉さんはリブロの中枢に「棚づくり」を据えるだけでなく、実際にベストセラーのように思想書を買った最初で最後の人だ。辻山さんは、今泉さんと時代は重なってはいないものの、その伝統を継ぐ絵本山、リブロ池袋本店のブックマネージャーをつとめてから独立した経緯があり、奈良さんがよくお話してくださる「書店」と「本屋」の二つの視点の持ち主なのだ。

二つ目は、人文書というジャンルそのものだ。定有堂書店は、「書店員の聖地」として名高いが、本棚の核にすえられているのは人文書である。今泉正光さんと奈良敏行さんはほぼ同世代であり、ともに人文書の黄金時代を経験している。

定有堂書店の読書会で、元リブロの辻山さんの本を主題にするなら、補助線としてはこの二つは外せない。奈良さんはそのことを私に教えてくれたのだ。

そして、この二つの点に橋をかけると、曇天の中、そこ

にうつすらと町の本屋の系譜という虹が、わずかながら浮かび上がっているようにも思えるのだ。

現代の日本の本屋の代表といっても過言ではない本屋「二二」の辻山さんも開業するまでには逡巡があった。その際に参考にし、相談にいった本屋が、ブックスキューブリックの大井実さんだった。その大井さんにも開店前にはやはり迷いがあり、その迷いを払拭するためにたずねたのが定有堂書店だったのだ。業界のほとんどの人から「やめておけ」と言われる中で、たった一人「がんばろうよ」と言ってくれたのが奈良さんだったと、大井さんの自伝的著作『ローカルブックストアである』には記されている。

つまり、奈良さんが大井さんに手渡したバトンは、リブロを離れて独立した辻山さんにもしっかりと届いていたのだ。

私は、この日、この場に立ち会えた感動をしみじみ噛み締めていた。こうした目に見えないバトンは、きつとそこに本の魅力を届けたいという意志がある限り、形を変えながらもずっと受け継がれていくに違いない。

本と「交換様式D」

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授

（「読む会」選書人）

九月五日（火）夜、『小さな声、光る棚——新刊書店「三〇」の日常』読書会が定有堂書店で開催された。主宰は読書室の三砂慶明さん、ゲストは本屋「三〇」店主で著者の辻山良雄さん。読書室による第二回読書会である。

当初は八月一日（火）開催予定だったが、鳥取県にも大きな被害をもたらした台風七号のため延期になっていた。ネット申し込みの方も含めて県内外から十数名の参加があった。

課題本は、前掲書（幻冬舎、二〇二二年）、副読本は田口由美子『書店風雲録』（原書二〇〇三年、ちくま文庫二〇〇七年）、永江朗『菊地君の本屋——ヴィレツジヴァンガード物語』（アルメディア、一九九四年）。その他に、今泉正光『「今泉棚」とリブロの時代——出版人に聞く——』（論創社、二〇一〇年）、辻山良雄『本屋、はじめました——新刊書店「三〇」の冒険（増補版）』（原書二〇一七年、増補版・ちくま文庫二〇二〇年）を読み、準備万端整えて読書会に臨んだのである。

読書会では、「棚」の並べ方、本屋の経営、お客さんとの交流、イベントの開催など普段は聴けない話が多く、とても刺激的で新鮮だった。

辻山さん、三砂さん、奈良さんたちのお話に耳を傾けているうちに、ひよつとして、と思いついたことがある。本は「交換様式D」（柄谷行人）と関連づけられるのではないかと。ここからは私の戯言に少しばかりおつきあい願えれば幸いである。

交換様式Dに思いいたったのは、「将来、本はなくなるのではないか」という話題になったときである。この問いには、「資本が高速回転する現代において、利益率の低い出版業界は存続できるのか」という経営論、「生成AIに代表されるデジタル世界が私たちの生活を大きく変えていく中、本の立ち位置はどうなるのか」という文明論、「（本それ自体は何らかの形で残るだろうが）紙の本はなくなってしまうのか」というメディア論など多くの文脈が絡み合っている。柄谷にバトンタッチするために、資本に話を限定しよう。

資本の回転（回収）はビジネスに携わる上では古くて新しい切実な問題である。例えば、現代に比してはるかに激動の時代である産業革命期を生きたアダム・スミス（一七二三—一七九〇）が『国富論——国の豊かさの本質と原因

についての研究』（一七七六年、数ある翻訳の中で私が読んだのは山岡洋一訳、日本経済新聞出版社、二〇〇七年）の中で、次のように論じた箇所がある。彼は国際的分業を容認しながらも、国内消費用の貿易に使われる資本が一回転するのに二、三年かかるのに対して、国内取引の資本はその間に一二回転することがある、と指摘する。「資本の量が同じでも、国内の産業を支え刺激する力は、国内取引の方が国内消費用の貿易よりも二十四倍も強い場合がある。」（上巻三七八頁）

この分析の是非はともかく、およそ二五〇年前に道德哲学教授（『国富論』は一七五九年に刊行された『道德感情論』の延長線上の著作）ですら氣にかけて言及する資本は、金融資本主義が支配する現代、私のような経済の素人には想像もつかないくらいの猛スピードでウェブ上を駆け巡っているに違いない。

史的唯物論の生産様式論を批判する柄谷は、『世界史の構造』（岩波書店、二〇一〇年）をさらに深めた集大成の書『力と交換様式』（岩波書店、二〇二二年）において、四つの生産様式を提唱する。交換様式A：互酬（贈与と返礼）・ネーション・古典古代的段階、交換様式B：服従と保護（略取と再分配）・国家・封建的段階、交換様式C：商品交換（貨幣と商品）・資本・近代ブルジョワ的段階、

交換様式D：Aの高次元での回復（資本Ⅱ国家Ⅱネーションの超克、アソシエーション?）。

『力と生産様式』の結論部分「Dは、Aとは違って、人が願望し、あるいは企画することによって実現されるようなものではない。それはいわば、『向こうから』来るのだ。」（三九五頁）にはがっかりさせられる。しかし、柄谷の交換様式論を「知の交換様式」として極小化して読み替えれば、案外いい線を行くのではないか。

古代ギリシアにおける対話の哲学（「知」の互酬制?）
↓封建社会の支配階級（例えばカトリック教会による「知」の独占）資本主義における「知」の商品化（「知」の使い捨て）↓「知」の互酬制の高次元での回復?

「知」の商品化を防遏するには、資本Ⅱ国家Ⅱネーションと切り離れた形で「知」を分かち合える場を構築しなければならぬ。「知」の多くは本に蓄積されている。本によって古今東西の「知」に触れることができる（文字化できない暗黙知の存在も否定してはならない。）

本は環境緊縛性を離脱し世界（存在）を開く（奈良さんの言葉）。とすれば、本を媒介する場としての「読む会」は高次元での互酬制の復活なのか。

読書会の後半、そんなことを考えていた。

知らぬことを知る妙味

木元 健二

(新聞記者)

空の青が、山陰より少し濃い気がした。

九月半ば。遅い夏休みで、北海道を旅してきた。といっても、住んでいる松江からの往來の日を除けば、あいだ三日の駆け足行程に過ぎない。

ただ、三十年前に同じく新聞記者になった悪友と、やはり同期入社 of 札幌勤務の友を訪ねたくなった。サラリーマン人生の下り坂に差し掛かった彼我をわらいたい。そんなたくらみも少しあった。

北の都もなお暑い、と聞かされたが、朝晩のさわやかな空気に包まれると、酷暑にさらされてきた五十三歳のくたびれたボディも、少し軽やかに稼働した(ように思う)。友とススキノで呑み、小樽の港町でガラス工芸をながめた。コロナ禍が落ち着いた後の、初秋の観光シーズンである。人気店は、国内外の客でごった返していた。

ふと余市に行きたくなった。「ニッカ」の蒸留所がある、ウイスキー好きの聖地である。製造工程が見られるガイド・

ツアーは結構なにぎわいだ、と聞いていた。でも試しに見学の予約電話をかけてみると、一人分だけ空きがある、というではないか！ 乗り込んだ電車が、海沿いの線路を走る。変わってゆく景色の先を見やると、心が弾んでくる。

☆

初めての海外旅行先は、一九九一年、夏の香港だった。大学二年生。旅慣れた先輩に誘われ、バイト代をはたいて行ってみた。

路面電車がけたたましいブレイキ音をたて、おもちゃ箱をひっくり返したような、ごちゃごちゃした街を駆け巡る。歩き回っていると、肉屋の裏手で何かをザブザブたらいで洗っているのを見かけた。それが豚の頭だと分かった時は、漂う臭気のわけを知り、一瞬、目が回った。一方で、摩天楼のバックに包まれた名物のフェリーが青みを帯びた光を放ってゆく夜景には感傷を誘われた。

格安と聞いたテラーで、手縫いのジャケットをオーダーしたのも忘れられない。今も手元に残しているが、あれから十五年も目方が増え、どう腹をすぼめてもボタンが留められない。ながめていると、追憶も情けないいろを帯びてくる。グリーンチェックのこじやれた柄は、三十有余年たっても色あせないのだが。

沖縄の離島を巡ったのは、前厄の頃。気の晴れないこ

とがあつた時期に、琉球文化に詳しい鳥取・万年筆博士の先代ご主人、山本雅明さんが誘つてくださったのである。

波照間島の海辺は光まぶしく、沖繩そばも泡盛もうまかつたが、一番の思い出は西表島でのカヌー・ツアーである。マングローブの木々を見上げ、悠久の時を感じながら進む。その心地よさといつたらなかった。

ふいに目が覚める思いに襲われたのは、カヌーがぐらぐら揺れたせいである。オールを漕いでいた山本さんが方向転換を図ったものの、思うに任せない。二人して乗る私も慌てて制御不能。細身の船体は、あわれにも転覆した。ぐつしより濡れたジーンズを履き通しの、帰路はえらく遠かつた。ただ、晴れぬ気持ちに妙にさっぱりした。笑うしかなかったからだろう。あれは年上の友人の、励ましてやろう、というエンボウシンリオだったのか。

新聞記者になり、いろんな地に足を運ぶ機会があつた。幸いだった、と言うべきだろう。近年では京都・祇園を尋ね、長崎の坂道をのぼった。思えば、出張では忘れがたいハプニングに出くわしたことはない。行く先も会うべき人も決め、段取りをつけてゆくからかもしれない。

☆

先日尋ねた、北海道・余市のニッカの蒸留所は一九三四年に建てられた。「日本のウイスキーの父」竹鶴政孝がス

コットランドで学び、かの地に似た冷涼湿潤な気候にひかれ、余市を選んだという。

それから九十年目になる今も蒸留所は現役だ。二条大麦から麦芽をつくる「製麦」、麦芽を粉碎して仕込み水と混ぜ、甘い麦汁をこしらえる「糖化」、そして発酵、蒸留、貯蔵熟成。巨大な魔法の壺を思わせるポットスチルと呼ばれる蒸留器。その形状の違いで、ウイスキーの味わいが変わってくる、と教えられた。

旅の醍醐味、などと訳知り顔で書くつもりもないが、知らぬ土地で知らぬことを知る。それはぼちぼち五十代半ばに差し掛かっても、やはりおもしろいことだと思いつた。我が好奇心、なお健在なり。

敷地内のミュージアムで味見ができた。のどが焼けるから、普段はハイボールか水と一対一のトワイヌアップで飲むことがほとんど。でも、その日だけはストレートでいきなかつた。三つの銘柄の滋味、香味、色みが染みしてくる。

聞かされた逸話が、リフレインする。余市の豊穡な自然に惚れた竹鶴は、仕上がったウイスキーをこう評したという。風の味、と。

本を作る側から (7)

村瀬 謙介

(小取舎)

所用があり日帰りで京都に行ってきた。四条、三条を通り叡山電鉄鞍馬線にある、のどかな住宅地が目的地だったのだが、帰りも京都駅からだったので外国人の多さに驚いた。元々多いのは知っていたが、よく行っていた二十年前とは明らかに違う。鳥取でこの状態になるとはまずないであろうが、仮になったとしたらオーバーツーリズム間違いない。現時点の受け入れ体制はどうなっているのだろう。日本人の人口は減る一方で海外から日本に在留する外国人の数はこの二〇年間で六〇%も増加している。

さて、以前から英会話には興味があったのだが、昭和の間違った英語学習のおかげで随分と捗らない。中学や高校で授業開始の挨拶の後の sitting もネイティブな人から言わせると「座れ」という冷たい命令口調らしいじゃないか。単語一つ一つの発音は大体の人はできるが、そ

れを繋げる会話文なので(待イングリッシュとも言われる)、格好良くない。それでも外国人の方には伝わるらしいのだが、問題なのはこちらが聞き取れないのだ。ネイティブの発音を最初から身につけておけば聞き取ることも容易いはず。自分が中学生の頃の英語の教科書と、今の英語の教科書はどのくらい違うのだろう。もうマイナスからのスタートである。

英語が苦手なのは昔の英語教育のせいもあるとは思いますが、日本語の多さゆえだとも思っている。表現したいことを英語に翻訳してから話そうとしてしまい、その日本語に適した英語が頭の中から出てこない。逆に膨大な日本語を話せることはすごいことだと改めて思う。出版社として覚えるべき日本語もまだまだ多いし、英語より日本語を使いこなせるようになった方が良いのではないか。鳥取に住んでいてこれまで外国人と話す機会がそれほどなかったのでもそも必要なのか? 英語を話せたらより世界中の多くの人と友達になれると言うが、それが果たして良いのかどうか。しかし、日本語を話す人が人口減少で全世界からどんどん少なくなっていることも事実である。日本語を大切にしつつもやはり英語は必要か

など。いずれ小取舎から鳥取についての本を出したいなんていう鳥取住みの英語圏の方も出てくるかもしれない。

やっと今、英語学習が面白くなってきたところだ。兆しが見えたのは日本語と英語を話せるアメリカ育ちのバイリンガル YouTuber（とフランス帰りのトリリンガルな日本人と、英語勉強中の日本人の三人組）の動画を観てから。ネイティブな人の発音をカタカナに強制的に直して通じるかどうかという企画で、例えば whynot? という「なんで？」という言葉をワイナツと言って通じるかどうかとか、よく使うフレーズを無理やりカタカナに直して通じるまでカタカナをいじくる動画が面白く、ちょっと勉強法を変えてみた。

今までは買った英会話の本をページの順に読んでいたのだが、自分がよく使う日本語を書き出して、必要となるフレーズを同じようにネイティブ発音で言えるようにしてみた。村瀬が使うフレーズから覚えていくなんて効率が良いやり方！

余談になるが、彼らは動画の中で、日本語の「前」と「後」が日本語を勉強する外国人にはわかりにくいという話を話していた。英語では「前 (front)」は自分より前という意味や時間軸でいうと未来という意味になり、「後」は back とか behind ということになるが、本のページをめくる時の「前のページに戻って」という時には逆の意味になるから混乱するらしい。「後のページ」は先のページということになる。「先」という漢字も、「最先端」では限りなく未来に近い意味になるが、「先人」となると過去のことになる。考えてもみなかった。この不思議な日本語の使い回しをいつ覚えたのだろう。

モンスターハンターでしか使っていなかった埃を被った 3DS を引っ張り出してきて「英語漬け」というソフトを買ってやってみたり、日常会話を延々と英会話で話しているポッドキャストを聞いたりしているうちに不思議なことが起こった。英語の勉強とは関係なくハリウッド映画を観た際に言葉が入ってくるのだ。文法がなんとなくわかった今、さほど難しい英語を使っていないことにも初めて気づき、ちよっと感動した。

汽水のほとりから (31)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

今年九月一日は、関東大震災から百年目だった。そこで様々な関連本が出ている。中でも売れているのが辻野弥生『福田村事件 関東大震災・知られざる悲劇』(五月書房新社)という本だ。十年前に出た本だが、版元が閉業して絶版になっていたのを増補改訂し、最近復刊された。九月から全国ロードショー(残念ながら、鳥取県には来ない)が始まる森達也監督の『福田村事件』完成に合わせて出たもので、増補部分には監督の特別寄稿も掲載されている。が、福田村事件といっても知らぬ人がほとんどだろう。大震災後の混乱のさなかに多くの朝鮮人が警官や民間の自警団によって虐殺されたことは比較的知られているが、朝鮮人と間違われて虐殺された日本人も少なくなかった。福田村事件もその一つである。ただし、この事件の場合、犠牲者追悼の慰霊碑が建てられたのは事件から八十年後の二

〇〇三年で、それまでほとんど知られていなかった。同年に出た森監督の『世界はもつと豊かだし、人はもつと優しい』(晶文社)所収の「ただこの事実を直視しよう」という文章によって、多くの人々の知るところとなった。

福田村事件は、一九二三年(大正十二年)の九月六日、関東大震災の五日後に千葉県東葛飾郡福田村(今の野田市三ツ堀辺り)で起きた。村を訪れた行商人の二団が休憩中に数名で舟の渡し場へ運賃の値段交渉に出かけたところ、船頭が「こいつら言葉が変だ」と大声をあげ、突然半鐘が打ち鳴らされたのを合図に、巡查を先頭に大勢の男たちが竹槍や日本刀等を手にして駆付け、彼らを取り囲んだ。本署の指示を仰ぐと巡查がその場を離れた途端、不安に駆られた男たちは彼らに襲いかかり、結局十五名の一団のうち九人を次々に殺してしまった。中には幼い子や身重の若い女性もいたとされる。彼らは香川県から薬や日用品等を売って旅を続けながらこの地へやってきた人々だった。彼らを襲って殺したのは福田村と隣の田中村の自警団の男たちである。全部で数十人いたというが、逮捕されたのはたった八人だけだった。しかも、殺人罪で起訴されて懲役刑を受けたが、翌々年には昭和天皇即位に伴う恩赦で全員釈放されている。うち主犯格の一人は、出所後に村長となり、後に市会議員にも選ばれている。告発すべき

立場の検事も自警団に悪意は無かったと語り、弁護費用も村費で賄われ、家族には見舞金まで支給された。その後、事件は闇に葬られていった。なぜこんなことになるのか。

前掲の森監督の本を読んで心を動かされた人の一人にフォークシンガーの中川五郎がいる。中川は、高石ともや、岡林信康、高田渡らと70年代初めに「関西フォーク」を牽引した人で、初期の「主婦のブルース」は、花田清輝が当時これを褒めていた文章がどこかにあったと記憶する。それはともかく、森監督の文章に心を動かされた中川は、九年前に「一九二三年 福田村の虐殺」という歌を自作し、唄い始めた。今その歌詞の一部によって、この事件が闇に葬られた理由を簡単に示したい。トータル30分近くある長い歌だが、後半部で中川は次のように弾き語っている。

「遠く香川のふるさとの村を後にして／どうして旅をしなきやならなかったのか／千キロ近く離れた千葉の果てまで／三豊郡のふるさとの村では／彼らに仕事はなく／稲を育てる田んぼもなく／小作料は高すぎる／地区の人のほとんどが行商をして暮らす／旅のつらき覚悟すれば／からだひとつで始められる仕事／虐殺現場の福田村から謝罪の言葉は届かず／地元香川の中からも抗議や糾弾の声は起ころず／無かったことにしようと言わんばかりに／県のお偉方は知らんぷり／虐殺された行商人のふるさと／香川の被差

別部落」当時の部落差別はこれほどにひどかったのだ。この事件の特異性はまさにここにある。

恐ろしいのは、加害者がごく普通の人々であったという事実である。前掲の文章の中で森達也はこう述べている。「彼らは僕らの祖父であり父であり、そして僕ら自身でもある。救いなどない。学ぶこともない。ただこの事実を直視するだけでいい。小賢しいメッセージなど不要だ」と。昨年は部落解放を掲げた水平社の結成から百年目だったが、部落差別は完全には無くなっていない。福田村事件は今も私たちの問題なのだ。中川の歌は次のように終わる。

「見知らぬ人には親切に／苦境の人には助けの手を／それがよその土地の人であれ／よその国の人であれ／たとえ自分たちと違っていても／言葉が違っていても／信じることから始めよう／それが人の心というもの／昔も今も日本人はよそ者を嫌い／身内だけで固まる／狭い心の持ち主なのか／デマや流言飛語に弱いのは臆病者の証拠／信じることから始めよう／人はみんな同じ／朝鮮人だとか部落だとか／小さな日本人よ／朝鮮人だとか部落だとか／小さな人間よ」震災の教訓は防災だけではない。

人民食堂の夜（下）

定有堂倉吉支店その④⑥

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

府政記者から、突然の人事で、淀川の花火大会をやることになった。手始めは花火の協賛金集めである。金額に応じて花火の「尺玉」と紙面広告の大きさが決まる。

上の人間は「夕刊時代の株主企業や昨年の広告主の名簿がある。関西の私鉄や製薬会社、百貨店がそろっているから楽勝や」と言うのだが、いざ始めると様子が違った。どこに行っても、いささか奇妙な応対を受けるのだ。

◇

◇

◇

別室に通されると、決まって目つきの鋭い年配の男二人が待っていて、「ところで、いかほどご入用でしょうか」と探りを入れてくる。「あ、十号玉ですとこの金額で、広告スペースは…」と説明を始めると、「では四十万円、出しましょう。ただし、ウチが出したことは他に絶対もらさ

ないで下さい」「いや、それでは後で税務署にまずいことになるので広告は…」「いえ、けっこうです」

やがて、この目つきの鋭い男たちは、企業が暴力団・総会屋対策として雇った大阪府警のOBであることが判ってきた。私たちはウラ社会と同じ扱いを受けていたのだ。「とんでもない夕刊紙を買ってしまった」と思った。

有名百貨店では「あんたここに『偽ブランドのバッグを販売』とデマを書かれて、えらい目に遭うたわ」と叱られ、大手私鉄では「『駅員が客をないがしろ』と二面に『カデカと』、化学会社では「『淀川に排水垂れ流し』と嘘八百」：まさにクレームの嵐。買収前の夕刊「大阪ニチニチ」にいったい何が起こっていたのか。

◇

◇

◇

府庁に松ちゃんを訪ねると「実は…」と小声で教えてくれた。「夕刊の末期は給料の遅配が当たり前で、一部の編集幹部や社員は、企業のあることないこと書いて、『この新聞が回りたくないなら、まとめて買い取れ』というようなくどい商売が横行してましてん」。松ちゃんも府庁内の使い走りやアルバイトでしのいでいたという。

ニチニチはもはや企業にとつて厄介、迷惑な存在になり、読者も離れていった。ゴルフ場をいくつも持ち「新聞は道楽だ」と豪語していたK社長も、赤字まみれの経営に廃

刊か売却を考えていた。そんな時「カモがネギをしょって」現れたのが私たちの新聞だった。

夏が近づき会場の準備が始まると、台船業者やごみ処理業者から「実は昨年の代金、まだ一円ももろてませんねん。まあ、あんたらに言うても仕方ないけど」とボヤかれた。

関西新聞が平成三年、新大阪が七年、大阪新聞が十四年時代の需要とスピードに合わなくなった大阪の夕刊紙は次々廃刊の時を迎えていた。私は淀川の両岸にひしめく「警察発表二十三万人」の花火客の群衆を、ひとつの時代の見納めのように、この目に焼き付けた。



思いがけず、代金を踏み倒されていた台船業者は北野天満宮の氏子総代で、「あんたら、夕刊時代と違って真面目やから、来年、天神祭の奉納花火を上げてくれへんか」という依頼があつた。大阪を代表する花火である。そのため終戦の翌年から続いてきた淀川の花火大会は、われわれの年で幕を閉じることになった。やがて私に「鳥取に帰れ」という辞令が下った。

送別会は、わがままを言つて警察黙認の遊郭街・飛田新地（この存在自体が大きな謎である）の料亭「鯛よし百番」でやり、さらに飲み直そうと府庁に向かった。

暑い夜、冷房も切れたので、十数名の男たちは上半身裸

になって知事の記者会見室で雑魚寝することに。夜中に突然、懐中電灯で照らされた。「まずいことになった」と焦ったが、松ちゃんが「あんじょう片付けますさかい」と声をかけると、老警備員は「じゃあ、松ちゃん頼むで」と何事もなかったように出て行つた。どこまでも「ユルい」大阪府庁、そして偉大なる松ちゃんだった。



鳥取に帰り、平穏な毎日に戻ると、松ちゃんら夕刊の記者たちと過ごした「人民食堂の夜」や淀川で花火を上げた日々は、どこか遠い世界の記憶のように感じ始めた。

松ちゃんこと松尾八十八記者はその後、持病の糖尿病が悪化し、片足を切断した末に亡くなった。「浪速のことも夢のまた夢」。そんな昨年末。

NHKの報道の回顧番組を観ていた。「これは大阪の西成暴動の当時の映像です。警察と暴力団の癒着を暴いた記事に、怒った日雇い労務者たちが西成署を襲いました」。ナレーションとともに画面の労務者が両手で高々と掲げた新聞には…なんと「ニチニチ」の題字が躍っていた。

松ちゃんが語つた「西成暴動の原因をつくつた伝説の男」、若野記者の話は本当だったのである。

ドクシヨカイ、ドクシヨシツ

松田 裕史

(高校教員)

いわゆる読書会というものには対面でもオンラインでもこれまで参加したことがなかった。コロナ禍によってオンライン読書会が近年、当たり前前の風景になりつつあるが、それでも参加したことはなかった。それがどういうわけか三月に二回も参加することになった。三月二十五日の語学教育研究所が主催するオンライン読書会、二八日の公立鳥取環境大学における三砂慶明さん主催の読書会。期日は語研の方が先だが、参加することに決めたのは二八日の方が先。それが呼び水となって二五日も参加してみる気になった。

語研の読書会で扱われた本は二年前、発刊された直後に読んだ本で『英語×「主体的・対話的で深い学び」』というタイトルだ。指導技術にフォーカスした本が多い中で、深い学びをタイトルに付した本は英語教育においては特に珍しい。二年ぶりに読書会前の予習としてパラパラめくつ

てみると、初任者からベテランまで幅広い読者層に対応しているバランスの取れた内容だなとあらためて思う。ところが、それから五か月経った今、あの読書会がどんな会だったのか思い出そうにも話された内容すら思い出せない。自分が喋ったことも思い出せない。メモを取りながら聞いていたはずだが、そのメモすら見つからない始末。その後ももう一度、同じ主催者の読書会に参加したがその時のことも記憶が朧である。一方、三月二八日に参加した対面の読書会のことはメモも残っておりよく思い出せる。メモの文字情報を頼りにその時の天気、場の空気感、顔ぶれ、三砂さんや岩田先生の話されたこと、他の参加者の感想など、ありありと甦ってくる。『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈―生活世界における公共性と倫理―』をめぐって、読む人が違えば様々な読み方や解釈があり、それを共有していく中で自分にも脳内スパークが起こる。この著書は哲学の専門書であり、全く哲学の知識がない読者が読もうとすればたちまち目眩に襲われるかもしれない。しかし、各章を読み進めるにあたっては時にやさしく概説が挿入されているので初学者でも読み進めることができる。哲学書でありながら、中ほどに二か所だけ文学的叙述の部分がある。マリアナ・パラオ海溝の調査の場面であるが、本書のテーマとは直接関係のない「裂け目」としかいいようのない

部分である。ただ、この裂け目があったからこそ、この本が生まれ出ることができたのだとも言える。

同郷でありながら橋田邦彦のことは情けないことに本書に出会うまで全く知らなかった。橋田について、これまでどれくらい研究がなされているのか(三二)で事前に調べてみたが目ぼしいものはなかった。唯一、金森修の著作だけが目に留まった程度だった。読書会で驚いたことの一つはその金森修の著作の実物を小原さんが持参され紹介されたことだ。これには唖らされた。環境大の一室で読書会が盛り上がっていくにつれ、僕のなかでは読書会と教育(学)をアナロジカルに捉えようとする発想が湧いてきた。教える人と教わる人の境界は曖昧となり、たびたび転倒する。学びによって自己、他者、世界を新たな視座や視点で見る契機を与えられる。自分の価値観や世界観がいかに浅薄なものかを思い知らされ、次の学びへの火がつく…。まさに、学校における学びが目指している理想の姿がそこにあった。三砂さんの読書室『三砂の巻頭言』には奈良さんの言葉が引かれている。「本は「驚き」によって世界(存在)を開く、それは環境緊縛性から世界開示性への開かれでもあり、ときにそれが「自由」の体験であり、また「救い」でもある。」この至言は現在の教育学のトップランナー達が追い求めているものにそのまま符合する。単に、本、読書、本屋の話

ではなく教育、学びのエッセンスまで包み込むメッセージにほかならない。若松英輔の言葉を借りれば、言葉の護符でもある。護符のように、三砂さんの読書室を支えている。

護符と言えば、辻山良雄さんの『小さな声、光る棚』にも護符のような言葉が散りばめられている。本屋の日常が描かれているだけでなく、それを通して働くこと、生きることについての深い洞察がある。教育の視座から読んでも実に読み応えのある内容であり、速読にはなじまない本である。「わたしはもうもどらない」「まともに考えることだけやればよい」などの言葉は、高速回転のために高速回転し、マニュアルやシステムに感情やその人らしさを消され、効率化の波に覆いつくされそうとしている教育現場への強烈なアンチテーゼにもなりうる。この本は著者の辻山さんを迎えた読書会に参加するために読んだが、ここでもやはり、目的を超える自由を体感した(國分功一郎『目的への抵抗』)。三砂さんが会の最後の方で発せられた「全身本屋」という言葉という言葉に心を打たれると同時に、それではあなたは何者なのかと問われている気もした。

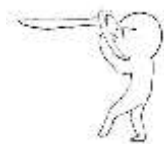
定有堂ビルの二階で行われた読書会。本屋という形はなくなってしまったが、定有堂は生きていた。本のビオトープは確かに、そこに存在した。

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

10月31日 火曜日 19時から

テキスト 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』

新潮文庫



定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

10月12日 木曜日 19時から

テキスト『レヴィナス・コレクシオン』ちくま学芸文庫
(「ヒトラー主義哲学に関する若干の考察」) 副読本『検証ナチスは「良いこと」もしたのか?』岩波ブックレット

定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)



太極拳教室 (会場 定有堂二階・他二カ所) 葉香クラブ

毎週 水曜 十九時半から 市役所 第一ホール麒麟スクエア

土曜 十三時半から 産業体育館

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

三段 公認B級指導員

岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』

—生活世界における公共性と倫理— 小取舎 2023

一八〇〇円本体



橋田邦彦・現象
学・アーレント
の再解釈
岩田直樹

生活世界における公共性と倫理

橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈

岩田直樹

小取舎

9784991249728

9784991249728

ISBN 978-4-99124972-8

ISBN 978-4-99124972-8

定価：1,800円（税別）

定価：1,800円（税別）

本書は、橋田邦彦の『現象学・アーレントの再解釈』を、その出版後、著者の思想がどのように展開したかを追う。著者は、橋田邦彦の思想が、アーレントの思想とどのように関係しているかを、その思想の展開を通じて明らかにしようとする。著者は、橋田邦彦の思想が、アーレントの思想とどのように関係しているかを、その思想の展開を通じて明らかにしようとする。

茶話

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

三十代初めに胃を悪くして此の方、コーヒーから遠ざかっている。医者には、何を食べても(飲んでも)いいですよ、と言うが、飲むとどうも、胃壁が荒れるような気がしてついつい避けてしまう。訪問先や、コース料理の締めくくりに出てくる時は仕方なく頂くが、自らの意思で飲むことはなくなつた。

そんな次第で、専ら茶党である。

祖父や父は茶好きで、到来物の菓子などがあると、「茶でも飲むか」と、いそいそと茶箆筒を出してきて、おもむろに茶を点て始める。筆者は、子どもの時分、菓子目当てに父の稽古に付いて行ったことはあるが、自身はついで習おうとは思わなかった。大伯母が茶を教えていて、誘われたが、やはり足が向かなかった。(体のいい見合いをさせられるぞ、と脅す人がいたのだ)

祖父は煎茶も好きで、おまきごのような煎茶器を揃え、孫の前で、湯をあつちに入れたり、こつちに戻したりしながら、淹れてくれた。

インフルエンザやコロナが流行する今頃は、なるべく日本茶で喉を守ることになっている。聞けば、掛川(静岡県、茶所である)の市民は、胃癌が極端に少ないそうで、何らかの抗菌作用はあるのだろう。気休めにも信じていれば、プラセボ効果も期待されようと言うものだ。

一番よく飲むのは紅茶だ。

最近、ティーバッグの箱物が矢鱈と安く、百ピース入りが五百円程度という商品も珍しくない。元が取れるんかいな、と他人事ながら心配になるが、何、層茶(ブロック)の再利用みたいなものだから、原価は紙と包装代くらいのもなのだろう。

とは言い条、ティーバッグもポットを使うと、それなりに美味しく飲める。冬場は、ポットを温めてから、バッグを入れ、三分くらい蒸らす。これだけである。どう逆立ちしても香りだけはどうしようもないが(ウイスキーやブランドーで胡麻化するのも便法。アールグレイやフルーツティーなどのフレーバー系は、まあいける)、茶本来の甘みも

出て、単独で飲むにはいさきか辛いものの、朝食や、ケーキなどと一緒に飲む分には先ず問題ない。

散々、色々な銘柄を試してきた。

出張や旅行の度に、マルコ・ポーロやらエディアールやら、マリアージュ・フレールやらダマン・フレールやら、珍しいフレーバーものを買って飲んできた。

出先で一番良かったのは、つくばのショッピングモールにあった花水木という店の、葎の花を使ったお茶。葎の香りがほのかに残っていて（たぶん香料だろうが）心が落ち着くお茶だった。

結局、最終的に行き着いたのは、昔から好きだった、トワイニングの〈プリンス・オブ・ウェールズ〉と〈レディ・グレイ〉。前者は、キーマン茶がベース。スモーキーな香りが、深い思索を呼び起こすかのようで、隠逸の暮らしに相応しい。後者は、ベルガモット系だが、〈アール・グレイ〉よりも着香が控え目で好ましい。グレイ夫人たる所以であろう。フレーバー系は、飽きがこない、というのが一番大事である。

純粹に茶葉、という点では、〈ジェームズ・テイラー

が良い。甘さが際立っている。何でも、セイロンで百年前まで栽培されていた茶を、復元したものだそうである。これは、「素」で飲むお茶で、茶請けは不要である。

青山に、紅茶博物館というのがあって、珍しいものを商っていたが、（今は、もう無いらしい）ここで、〈ジャムの王様〉というのを買った。

御存じの方は御存じのミオ・ジャムで、名前に偽りなく、まことに美味なるジャムであった。アプリコットをベースに、色々ブレンドされているようだが、確かに、これ以上のジャムを食べたことはない。夏目漱石がこれを知っていたら、毎週、ダース買いをしたことだろう。

もうひとつ想い出のジャムは、新潟のメーカーが作っていた、〈越後姫〉という苺を使ったコンフィチュール。容量も少なく、値段も結構なものだったが、絶品であった。砂糖で甘くせず、酸味を残したブレザーブ・タイプで、爽やかな食後感が素晴らしかった。半ダース程買って、知人にひと瓶進呈したら、子どもが全部舐めてしまった、と言っていた。漱石二世は、こんな所に。

鳥取あれこれ その八十六

内田 克彦（地域研究家）

（承前）

一九二九（昭和四）年九月に開催された「全日本婦人経済大会」で、座長が終わりの挨拶をしたとき、林歌子が緊急動議として「軍備縮小を満場一致で建議せんことを求む」を提出して満場一致で可決となった。

林歌子は、当時六四歳、キリスト教婦人矯風会大阪支部長であった。彼女は、翌一九三〇（昭和五）年に、ロンドン海軍軍縮会議出席の各国全権大使に平和嘆願書を提出するため訪英している。その林歌子と関わったとされるのが、鳥取の藤井政雄・延夫妻である。

一九八四（昭和五九）年に、藤井幸男・藤井英男共編で『家郷遍歴』が刊行されており、藤井英男による次の記述がある。

私の母〔藤井延、卯垣・馬淵家より嫁す〕と、林〔歌

子〕女史との間の連絡をつけたのは、私の祖母の妹に当る、窪田イセというお婆さんである。封建制の強い山陰の鳥取で、明治や大正の頃にクリスチャンになった人だから、ずい分周囲から冷眼視されたに違いないが、ところが此のお婆あさんは、生来の樂天的な性格で、周囲のそんな思惑には無頓着に行動していたのだから、考えてみれば偉い人だと思う。そしてこの窪田のお婆あさんは、林女史が伝道旅行で鳥取に来られた時、私の母を伴って、ベネット氏邸で林女史と会ったということである。

そして母は、矯風会で林女史の助手として働く決心をきめ、大正十年の冬、私〔英男〕の小学一年生の時、単身出奔したのであった。

因みに、「窪田イセ」の名を『鳥取教会百年史口』に載る「受洗・転入会者名簿」から探したが見つからず、林の来鳥の記述は、一九二五（大正一四）年以降からであり、それ以前の記述はなかった。さらに調べる必要がある。

なお、一九二〇（大正九）年から頻繁に鳥取を訪れていたのは、神戸基督教婦人会会長の城のぶ女史である。ベネット宅へ数日滞在して精力的に活動しており、その結果、一九二二（大正一一）年十一月に矯風会鳥取支部が発足するのである。

さて、父の藤井政雄は、地方文学青年の草分けであり、『家郷遍歴』に載る「文学青年の集い（明治43年8月）」と題した写真には、白井喬二、野村愛生、吉村撫骨などと並んで、正雄（蒲水）も写っており、一九二二（明治四五年）創刊の文学同人雑誌『水脈』の同人でもあった。

さらに、一九一七（大正六）年の半ば頃から始まった電気市営運動のために翌年一月に設立された「電気市営期成同盟会」の、政雄を含む六名が同年二月に『因伯時報』本社に押しかけ、主筆の竹内硯南を殴る事件が発生、政雄は、罰金刑を受けている。同年八月に設立された「鳥取市青年愛市団」の幹事にも名を連ねている。

また、延が政雄と結婚したのは、一九二二（明治四五年）、次男の英男を産んだのは一九一五（大正四）年である。延は、短歌に打ち込み、「竹柏会」に同人として参加し、一九一九（大正八）年から翌々年にかけて『心の花』に寄稿している。一九二二（大正一〇）年に創刊された短歌同人誌『山かげ』には、同人として参加している。

一九二二（大正一〇）年の冬、単身出奔した延はどうしていたか。一年後に、政雄も英男たちを連れて京都に出て、夫婦ともに林女史の推薦で「平安女学院」に奉職したのである。一九二六（大正一五）年には退職して、河原町蛸葉

師にて喫茶「カナリヤ」を開店、東山ダンスホールの経営にも参画した。満州事変後は、大阪に出る。延は一九四二（昭和一七）年春、大阪の四天王寺病院に入院、六月に四九歳で亡くなった。翌年には歌集『野ぎく』が刊行されている。政雄は、一九四七（昭和二二）年一〇月、五六歳で亡くなった。

一方、英男である。小学五年の頃、栗村龍象を家庭教師に得る。京都一中、三高へと進学するが、一九三三（昭和八）年「滝川事件」で、三高内で学生大会を画策したとして中退処分を受ける。退学後は大阪に出て、コミンテルン第七回大会のデイトロフの演説「人民戦線戦術の諸問題」を翻訳、秘密出版し配布する。一九三六（昭和一一）年八月治安維持法違反で検挙、転向声明を書いて、執行猶予となる。出所後、一九三八（昭和二三）年一〇月に招集礼状が無い込む。

波乱万丈の藤井政雄一家の軌跡を辿れるのは、いつに『家郷遍歴』のお陰である。

（以下、続く）

八代日記

(四十二)

齊藤仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

八月某日

神戸ヘラバラウンジにてライブ。ヘラバラウンジに呼んでもらえるようになって何年くらい経つだろうか。十年近く経ったかもしれない。東京でものすごくお客様の少ない我々にとって(少なくともいいのです。来てくれる方がいるだけで)、もうここはホーム。東京はアウェイ。というくらいあたたかく迎えていただいている。

声援は黄色ではなくドス黒いヤジなのもまた素晴らしい。

ここに呼んでもらえなくなったら終わりだな、と毎年考えてしまう。一度呼ばれなかった年があり、ああ、またホームタウン探しの旅に出なきゃ、と思ったりしたが、安住に安堵を見出そうとしているのは演奏のフレッシュさに悪い影響を与えるように思うのでまだ彷徨はやめてはいけない。加齢とともに失せゆく冒険心、好奇心をなくさないために人生をすり減らさない技術が必要だ。でもどうだろう、好奇心がなくなるのもまた楽しいような気がする。注意散漫な自分には的が絞れていいのかもしれない。

対バンは大阪のスリチズと岡山のテストパターン。スリチズはこれぞローファイ、オルタナ、って感じのヨレヨレだが素晴らしい演奏だった。彼らをぶつけてくる店長のセリフは最高。

2番目が我々。「時間」という曲がなんだかうまくいった気がする。未だヤジにヤジで切り返しができないのでいつかヤジで応酬できるようにしたいがそもそも演奏中に客席の方を見ることがさえままならないので十年くらいかかりそう。

トリがテストパターン。それぞれの仕事の都合でなかなか集まらないらしくとても久しぶりのライブだったそう。岡山からたくさんさんのファンが観に来ていた。大人の演奏を見せつけられ、まだまだガキな自分が少し恥ずかしくなった。

ライブの後はマノ先輩のデejェイ。いつものごとく我々がいちばん最後まで踊った。毎夏同じことを書いていく気がする。

八月某日

神戸の帰り、途中下車して岡山に寄る。知人とテストパターンのボスと軽く飲んで雑談。このまま夜まで飲みたかったが家族を放置しすぎることはできない。熊本へ頑張っ

て帰る。

八月某日

一週間なんとか仕事をやり遂げ週末は東京の西荻窪。京都のバンドのレコ発ライブにお誘いいただく。僕らは二番手。一番手のバンドのドラマーが素晴らしすぎて刺激と影響を受けてしまい、とてもでかい音で演奏してしまった。ライブ後リーダーには褒められたので良かったんだと思う。主催のバンドもめっちゃ熱かった。特にトリ前のラップグループのESUがカッコ良すぎて次のアルバムはラップアルバムにしなきゃいけないのではないかとライブの間じゅう考え込んでしまった。

八月某日

また一週間ギリギリの精神状態でなんとか仕事を切り抜け、切り抜けたという感想しかなく何をしたかほとんど覚えていない。切り抜け、またも東京へ。東高円寺ユーフォークラブ。シンムラテツヤとスーパークーボーイズの主催でレストランズ、三輪二郎バンドと共演。三輪さんは歌も曲もギターもカッコ良すぎて、小手先で音楽やっちゃダメよと思わされてシビれる。三輪さん終わる頃には酔っ払ってしまってシンムラさんの時の記憶が薄い。終電逃した三

輪さんと沖縄料理屋で打ち上げ。翌朝疲れがどつと出た。が朝から踏ん張って羽田へ。熊本へ帰る。もちろん三週間かけて大赤字である。

八月某日

平凡社のウェブメディア「ウェブ平凡」の某記事でケバブジョンソンのことが書かれているのを見つける。身に余る光栄。『本の雑誌』2023年9月号「平凡社はほんとうに平凡なのか？」を読んでいたので良い偶然。

そのほか最近買った本は『暮らしの手帖』2023年夏号、『It's all about DJ QUIK』vol.2 というやばい本。ワダヨシ『ナンブラーマン 魚醬男』、巖谷國士『旅と芸術 発見・驚異・夢想』（平凡社）、『君たちはどう生きるか』劇場版パンフレット（何も書いてなかった！）、『レコードコレクターズ』2023年9月号「バート・バカラックの名曲を聴く」、アラン・ムーア、ジェイセン・バロウズ『ネオノミコン』（国書刊行会）、など。加えてジョジョのコミック文庫版を義兄からもらう。全く読みこなせていない。

仕事中に辻口博啓『軽やかさの秘密』（柴田書店）を読んだら、これはとてもすごい本では？と思えてきた。製菓学校に通うようになってからわかる本の凄さ。

家路

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

九月、仕事がひと段落したので遠くに行きたくなって、朝氣づいたら、神戸・三ノ宮駅に向かう、はくとのチケツトを買っていた。

二〇二〇年三月コロナ禍と共に移住した私は、ふらっと県外に出かける発想にまだ慣れていない。県外に出かける時は、すなわち実家のある東京に帰る時ばかりになっていた。東京に帰るとなると――一度大雪でバスと新幹線に乗ったが――余程のことがない限り、空路を使う。

おそらく、はくとに乗るのは、人生で二回目だ。初めて鳥取に来たのは小学校の修学旅行だ。

幼稚園から小学校卒業まで、私の家は兵庫県の芦屋市にあった。「芦屋に住んでいる」というと、やはり東の白金台、西の芦屋と知られた高級住宅街のイメージが先行して、あらぬ妄想をさせてしまう。我が家は貧乏ではないが、もちろん大金持ちではない。それもあって、普段は「神戸のあたりにいたんです」というように濁している。実際私が

住んでいたマンションは、建物の西側の道路は神戸、東側は芦屋という端で、阪神芦屋の駅まで、十分ほどの位置にあった。つまり、兵庫県の小学校に通ったので、修学旅行は、鳥取が最初の目的地になっていたのだ。

当時、週末はよく三宮や元町に出かけて、ジュンク堂に行つて本を買ったり、デパートの地下でご飯を買ったりした。最初の頃は車でおもちゃ屋に行っていた。

「神戸は都会だね」

「都会じゃないわよ」

と東京出身の母に言われる。

「ママが神戸は都会じゃないって」

「えりのママ変だよ。神戸は都会だよ」

と友達に言われて我に返る。母は骨の髄まで東京の人だ。おもちゃと言えば、「おもちゃなおきないと」と片付ける時に言ったら、「なおすって関西弁じゃない」とその場で母に直された。おかげさまで、私は関西弁を喋れない。

横浜育ちの父にとつても、芦屋は故郷ではなく、彼の母親の故郷で、色々あつて疎遠になってしまった親戚がいまだに住む町だ。結局、父の仕事の関係で、中学進学と同時に東京に移った。「芦屋の駅で、小学校の親友と最後のお別れをした。てつきり、その親友たちと中高まで一緒に過ごすと信じていたものだから、当時は、大人に裏切ら

れたように思った。ゆううつだった。

加えて、コロナ禍直前の年、その父方の祖母も、芦屋から関東に呼び寄せられたため、今の芦屋や神戸に私に縁がある人はほとんどいない。

とりあえず、三時間かけて、三宮まで来た。特に目的もないので、記憶を辿ってジュンク堂に行くことと、適当に見つけた「こども本の森」に行くことだけ決めた。

三宮の駅前、市役所のあたりは都市開発が進んでおり、「こども本の森」という子ども向けの本を集めた施設ができていた。週末は一時間半の予約制で、多くの親子連れが来ている。絵本や児童書だけを集めた空間で、それだけなのに建物は本でいっぱいだった。その奥深さ、幅広さに一人で来た私も感動した。子どもの本は馬鹿にできない。

ジュンク堂は駅前の店と三宮センター街の店があり、後者によく行っていた。ただ、小学校高学年の頃には、手狭な児童書のコーナーには飽きてしまったと記憶している。そして、「子どものことをみくびる大人にはならない」などと決心したものだ。当時と比べると店舗全体のフロアは縮小したが、端の端に追いやられていたはずの児童書コーナーは、以前より広くなっていたような気がする。

思えば、神戸にいる頃は、いつも誰か大人について歩い

ていた子どもだった。自分一人で街を歩いた時間は、本
- 27 -
当に短い。結局、中学進学と共に移った東京の方が、思
い出も知り合いも多い。それ故に、神戸を、ましてやあら
ぬ邪推をされる芦屋のことを故郷・地元と呼ぶ気はなくなっ
てきた。私が生まれたのは、東京だ。本籍は、父のおかげ
で神奈川にある。きつと私のプロフィールを書くなら、そ
こには、神戸も芦屋も兵庫県も、跡形もない。ときどき、
それが寂しいと感じるのだが、この類の経験に名前がない
ので、人に話したこともあまりない。

帰りのバスに乗る前に、阪神の優勝セールの横断幕がか
かった神戸阪急のデパ地下でお弁当を買う。阪神が優勝し
たのは私が小学生だった時以来だ。バスターミナルに向か
おうとすると、そこに阪神の改札があった。

もし、このまま乗ったら、あのおだやかな場所に帰れる
のではないかと引き込まれそうになって、その先には誰
もないことに気づく。

小学校を卒業して、同じ友達と中学に上がる未来もあっ
ただろう。私が関西弁を祖母のように喋る未来もあっただ
ろう。それは偶然と決断の重なりで、なかったことに。全
てありえないことになった。

ちよつといいホテル



ドラメリア (座敷わらし)

小旅行でちよつといいホテルに泊まった。

贅沢ではなく、急な宿探しで空きが見つからなかったから。自分で探す場合は「ホテルⅡ寝るための場所」としか考えておらず、多くは望まない。旅先のグルメや温泉にもたいして興味がない。住まいや生活の営みを快適にするのについて、自分の中の優先度が低いのだろう。

さて、ホテル。連休の中日とあつて賑わっていたが、あちらの都合でツインルームをシングルコースで使えることになった。部屋に足を踏み入れると、さすがに広い。ベッドと壁際の机以外にテーブルが備えつけられているあたり、普段慣れたホテルとはひと味違う高級さを感じる。コーヒード党なのでいつも水と一杯用のドリップバッグを購入して持参しているが、どちらも備え付けで用意してあるところも、至れり尽くせり感。インスタントじゃないんだな。

せっかくだから、くつろぐ用と就寝用のベッドを分けようか。思いついて、寝転がってテレビを点ける。テレビな

し生活が長いので、あらゆる番組がめずらしい。そうか、今はこういう番組があるのか。なるほど、ネットで名前を見かけるお笑い芸人はこんな人ね。ふむふむ……

気がついたら外は明るく、片方のベッドをこぢんまり使っただけでラグジュアリーな一泊は終わった。荷作りの際、もったいないので前夜に購入した水を鞆に詰めた。旅をとにした友人の「窓からの眺めが素敵だったね」という台詞に、カーテンを開けもしなかったことに気づく。

そんなホテルの思い出。異空間での、稀有なひととき。



・編集後記：

最近洗濯機が壊れてコインランドリーで凌いでいます。復活しないものか。未練。電子レンジも調子が今ひとつ。同時期に買ったものばかりなのでラッシュが怖いこの頃。

ドラメリア (編集長)

九月一七日 (日) 三砂慶明さんの本拠地で「読書室」読書会を行いました。課題本は三砂さん著書『千年の読書』誠文堂新光社。定有堂教室「読む会」も岩田直樹さんはじめ参加。

奈良敏行 (発行人)